

戦争を語り継ぐ集い・かごしま
講演会



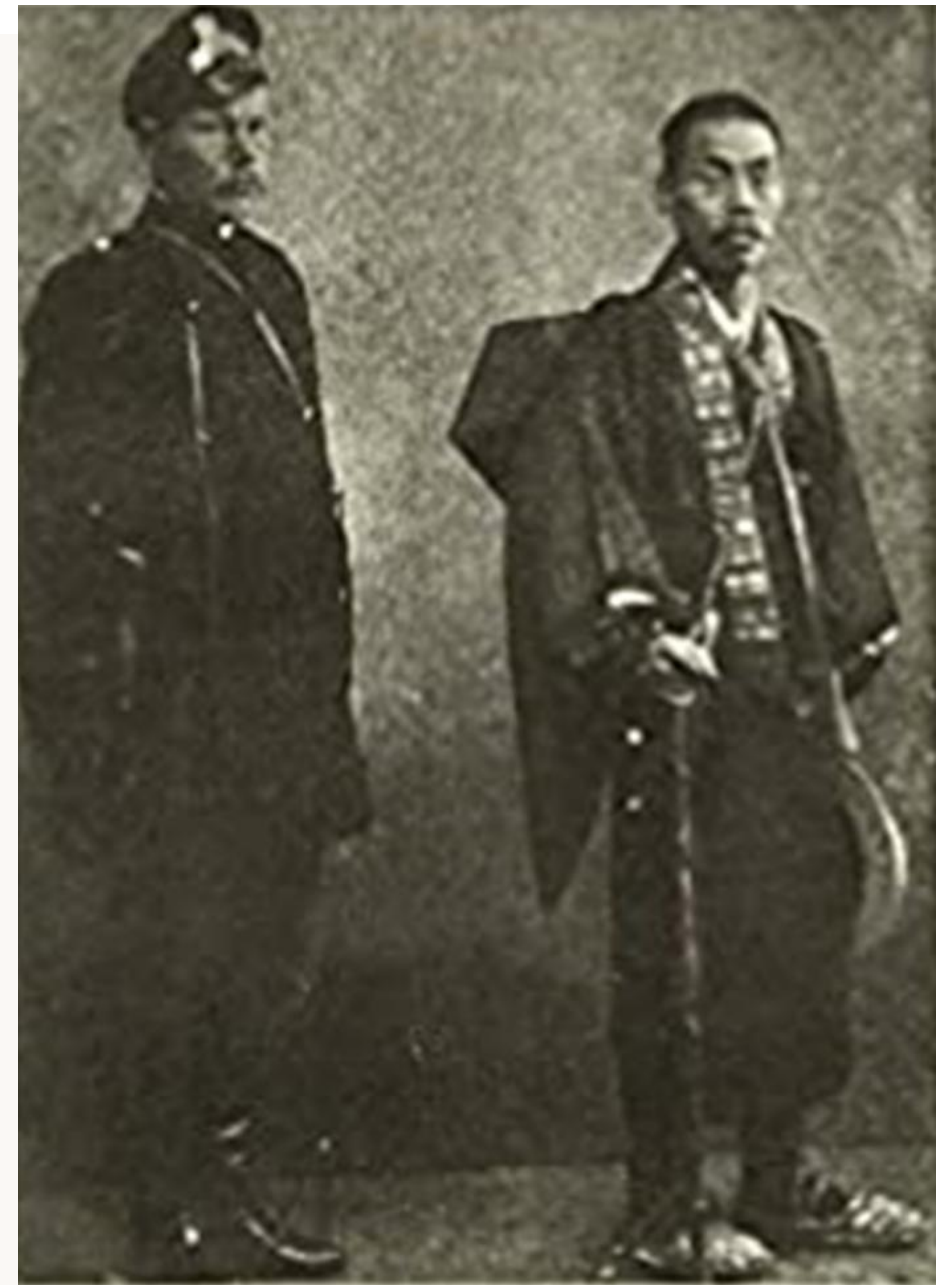
太田覚眠を語る

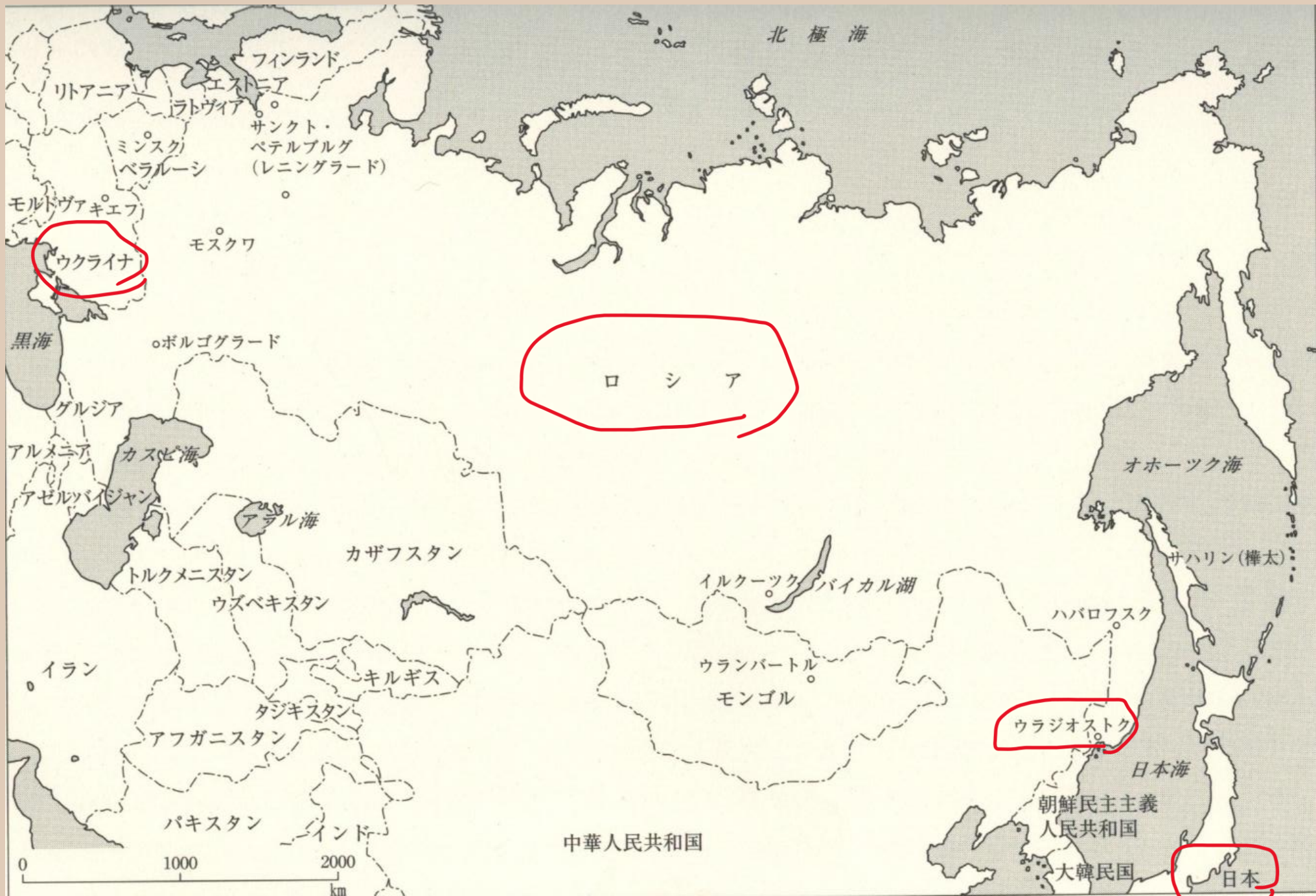
— 日露戦争時、シベリア残留邦人800名
を救出した僧侶の思想と行動 —

2025年10月11日（土）
鹿児島市市民福祉プラザ
大下 郁子

目次

- ①はじめに
- ②太田覚眠との出会い
- ③太田覚眠の生涯
- ④日露戦争における太田覚眠による
シベリア残留邦人帰国支援活動
- ⑤おわりに





中日新聞

2021年7月12日

僧侶が見た「ソ連誕生」

ロシア報道の先駆け 太田覚眠

レーニン支持「宗教的」 指導部分析序列に着目

日露戦争や社会主義革命が続いた、千世紀初め、ロシア極東で布教に取り組んだ三重県四日市市の仏教僧、太田覚眠が注目を浴びている。ソ連の独裁者スターリンに会った印象を名古屋新聞(中日新聞の前身)

「一つに寄稿するなど、ジャーナリズムでの活躍が顕著だ。ソ連誕生という世界史の大事業は、異能の宗教家の目にとどったのか。」
(ウラジオストクで、小柳悠志)



「統領が3代続け『イーン』」スターリンも喜色満面

日本で浦潮と呼ばれたロシア極東の港町ウラジオストク。旧日本人街で近代の商業施設から路地に入ると、一軒一軒と古い民家が並ぶ。はためく洗濯物が下町情緒を漂わしている。

「かつて、この建物の正面に、居たという。覚眠がウラジオストクに渡った一九〇〇年代初め、浦潮小学校で校長をしていたのが、与良松三郎。後に名古屋新聞の社長となる教育者兼ロシア語通訳だ。覚眠は与良とも

にロシア分析にいそしみ、名古屋新聞で数多くの記事を発表することになった。約三十年にわたるロシア滞在で覚眠が気づいたのが、権力の極集中を生むロシア民衆の精神的な土壌だ。

- ⑤太田覚眠＝1931年撮影、中日新聞社所蔵
⑥覚眠が発表したロシア分析の記事＝1932年1月6日付名古屋新聞から
⑦ウラジオストク駅を見下ろすレーニン像＝小柳悠志撮影
- | | |
|--------|------------------|
| 1866年 | 四日市市法泉寺の子として誕生 |
| 1903年 | 布教のため日本からウラジオへ |
| 04年 | 日露戦争勃発 |
| | シベリアで邦人救出 |
| 17年 | ロシア革命 |
| 18～22年 | 日本、革命に干渉(シベリア出兵) |
| 31年 | モスクワへ |
| 36年 | モンゴルへ |
| 39～45年 | 第2次世界大戦 |
| 44年 | 死去、モンゴルで葬儀 |

※太田覚眠とロシアの出来事
※松本郁子氏の著書など参照



覚眠はモスクワでスターリンと会った時の印象も名古屋新聞に寄せている。秘書にねじ込み、スターリンと数分の

面談を許された際、覚眠が「この国がレーニン、カリーニン、ソ連初期の革命家、スターリンと代わって統領が『イーン』と顔を踏んでい



浦潮小学校と浄土真宗本願寺派の布教所があった建物の前で説明するモルグン教授＝ウラジオストクで(小柳悠志撮影)

極東ロシアにおける日本人社会の生成と発展

【歴史】

幕末開国直後 極東ロシア地域への日本人の出稼ぎ始まる

1891年（明治24） 日本郵船会社によるウラジオストクー敦賀直行航路開設
シベリア鉄道着工

→日本人出稼ぎ者増加

1904年（明治37） 日露戦争→日本人引揚げ

1905年（明治38） 日露戦争終結→日本人出稼ぎ者増加

1917年（大正6） ロシア革命

1918年（大正7） シベリア出兵

極東ロシアの日本人の総数約7,000人

（ウラジオストクは約6,000人）

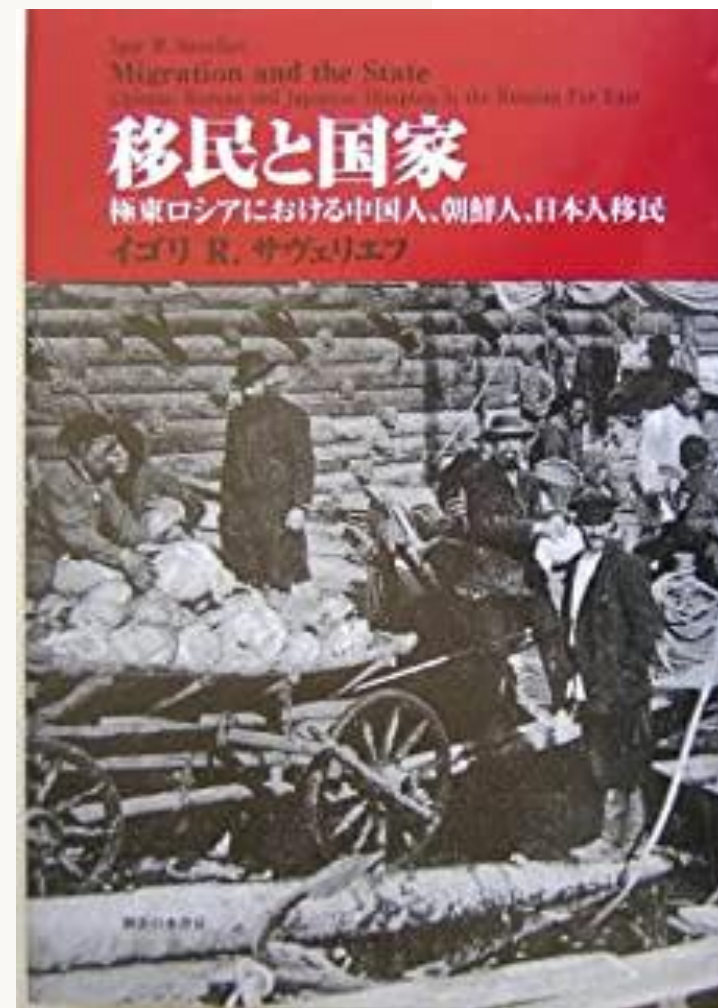
1922年（大正11） シベリア撤兵→日本人のほとんどが引揚げ

1930年代 スターリン粛清→極東ロシアにおける日本人社会の消滅

【極東ロシアに渡った日本人の特徴】

(1)長崎、熊本、佐賀出身者が多い

(2)商業、サービス業、「性産業」従事者が多い



浦潮本願寺（浄土真宗本願寺派）

1886年（明治19）～1938年（昭和13）

日本人居留民の「心の拠り所」

起工式（大正4年）



対面所完成（大正5年）



おおた かくみん
太田 覚眠 (1866-1944)

1866年（慶応2）三重県四日市市法泉寺（浄土真宗本願寺派）生まれ（幼名猛磨）

1893年（明治26）得度→「覚眠」と改名（28歳）

1900年（明治33）東京外国語学校（現東京外国語大学）露語別科在籍

1903年（明治36）西本願寺の命を受けシベリア開教使としてウラジオストクへ

1904年（明治37）日露戦争、シベリア残留邦人救出（39歳）

1905年（明治38）従軍布教

1917年（大正6）ロシア革命

1918年（大正7）シベリア出兵、従軍布教監督

1931年（昭和6）日本に帰国

1936年（昭和11）モンゴルへ

1944年（昭和19）モンゴル内蒙古集寧集寧寺で客死（79歳）

1904年(明治37)1月時点でのシベリア 及び中国東北(満洲北部)の在留邦 人数(川上俊彦の報告による)

ウラジオストク 3,000名
ニコリスク 600名
ハバロフスク 250名
ニコラエフスク 300名
ブラゴヴェシチェンスク 230名
チタ 40名
イルクーツク 30名
スレチェンスク 30名
その他各地 500名
北満洲及び東清鉄道沿線 1,500名

合計 6,480名

日露開戦後シベリア及び満洲北部の残留 邦人数(川上俊彦の報告による)

ウラジオストク 50名
ニコリスク 4名
ノヴォキエフスキー 43名
フンチュン 4名
ブラゴヴェシチェンスク
245名
ゼーヤ 40名
ニコラエフスク 258名
スレチェンスク 17名
ネルチンスク 12名
チタ 17名
ウエルフネウジンスク 2名
イルクーツク 25名

キャフタ 1名
トムスク 5名
ポグラニーチュナヤ 10名
ムーリン 1名
ハンタヘーザ 4名
イメンボ 10名
ハルビン 不詳
ジャラントン 15名
チチハル 30名
ブフタ 20名
ハイラル 52名
タイマゴウ 21名
その他各地 100名

合計986名

かわかみ としつね

川上 俊彦(1862-1935)

1862年(文久元)新潟県村上市生まれ

1884年(明治17)東京外国語学校ロシア語学科卒業、外務省入省

1900年(明治33)ウラジオストク貿易事務官

1904年(明治37)日露戦争、シベリア在留邦人引揚指揮

1905年(明治38)水師營の会見で乃木希典とステッセルの通訳

1907年(明治40)ハルビン総領事

1909年(明治42)伊藤博文暗殺される、随員の川上も負傷

1926年(大正15)北樺太鉱業会長

1929年(昭和4)日魯漁業社長

1935年(昭和10)死去



露西亞物語

太田覺眠著

冥護

一、我れ佛の足とならん

浦潮に冬が来て、海は氷に閉ざされ、陸は雪に埋められる様になると、いつも日露戦争當時の事を思ひ出す、私は開戦當時本願寺の開教使として浦潮に居たのである、正月の末から危機に陥つて居つた日露談判は、二月に入つて愈々破烈の状態となつた、吾貿易事務官川上俊彦氏は二月の二日に「シベリア」各地の居留民會へ

冥護



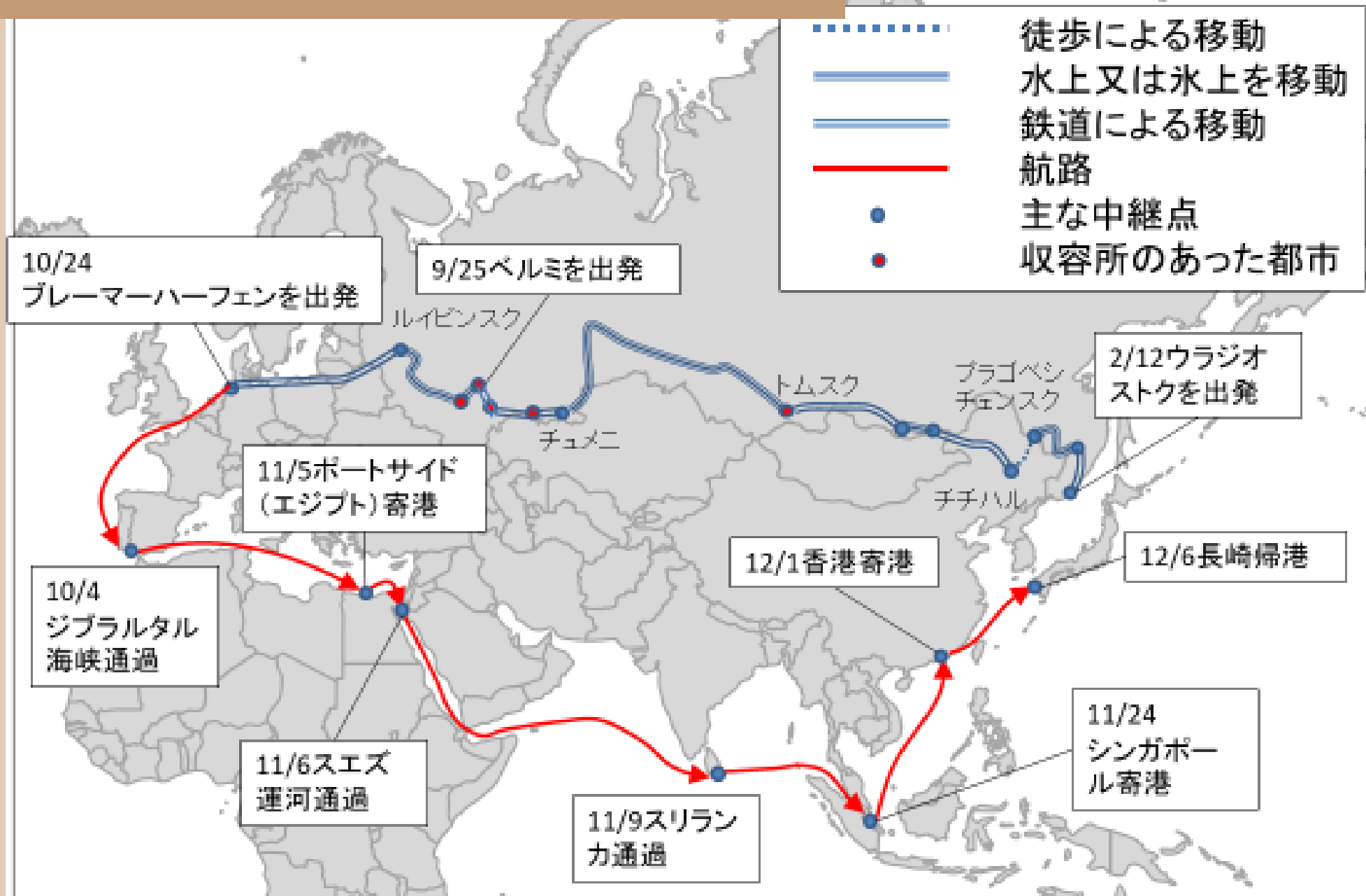
（月二、七十三治明）行旅上氷ルームア

已^{すで}敵^{てき}地に^ち殘^{ざん}留^{りゅう}せねばならぬ事^{こと}になつたと云^いふ電^{でん}報^{ぱう}が到^{たう}着^{せき}した、親^{しん}戚^{せき}縁^{えん}故^このある者^{もの}は此^{この}電^{でん}報^{ぱう}を見^みて非^ひ常^{じょう}に落^{らく}膽^{たん}し、殘^{ざん}留^{りゅう}者^{しや}の身^みの上^{うへ}を氣^き遣^づふた
けれども今^{いま}更^{さら}致^{いた}方^{かた}がない、私^{わたし}も其^{その}人^{ひと}々^々の來^{くる}のを待^{まち}つて居^ゐつた一人^{ひとり}で
ある、敵^{てき}國^{こく}内に^{ない}殘^{ざん}留^{りゅう}させねばならぬとは如何^{いか}にも遺^い憾^{かん}千^{せん}萬^{まん}な事^{こと}である、
憐^{あは}れな事^{こと}である、今日^{けふ}にも事^じ務^む官^{くわん}は國^{こく}旗^きを收^さめて此^{この}地^ちを引^ひ揚^あげるので
ある、爾^{その}後^{のち}此^{この}等^らの人^{ひと}々^々は誰^だれを憑^{たより}に何^{なに}を頼^{たの}みとするのであるか、敵^{てき}國^{こく}の
政^{せい}府^ふ敵^{てき}國^{こく}の官^{くわん}吏^りに保^ほ護^ごせらるゝのである、世^よの中^{うち}にこんな心^{こころ}細^ほいこん
な憐^{あは}れな事^{こと}が又^{また}とあらうか、私^{わたし}は此^{この}人^{ひと}々^々に對^{たい}してどう挨^{あい}拶^{さつ}をして日^に本^{ぽん}
へ歸^{かへ}つたらばよいのであるか、其^{その}詞^{ことば}がないのである、私^{わたし}は佛^{ほとけ}様^{さま}のおぼし
めしを聞^きくことにした、船^{ふね}に乗^のるべきか、殘^{ざん}留^{りゅう}者^{しや}を見^み舞^まふべきか、幾^{いく}度^{たび}も
佛^{ほとけ}様^{さま}のお心^{こころ}を聞^きて見^みた、幾^{いく}度^{たび}訊^きねても佛^{ほとけ}様^{さま}は船^{ふね}に乗^のれとは仰^{おつ}しや
らぬのである、私^{わたし}は佛^{ほとけ}様^{さま}の足^{あし}となつて佛^{ほとけ}様^{さま}のおぼしめ通^{とほ}り、佛^{ほとけ}様^{さま}の指^{さし}し

給^{たま}ふ處^{きよ}へ赴^{おもむ}かねばならぬと決^{けつ}心^{しん}した、早速^{さつそく}川^{かは}上^{かみ}事^じ務^む官^{くわん}を訪^{たづ}ねて、殘^{ざん}留^{りゅう}同^{どう}
胞^{ほう}慰^ゐ問^{もん}旅^{りょ}行^{かう}の願^{がん}書^{しよ}を差^さ出^だした、事^じ務^む官^{くわん}は以^{もつ}ての外^{ほか}の事^{こと}であると云^いつて
胞^{ほう}慰^ゐ問^{もん}旅^{りょ}行^{かう}の願^{がん}書^{しよ}を差^さ出^だした、事^じ務^む官^{くわん}は以^{もつ}ての外^{ほか}の事^{こと}であると云^いつて
願^{がん}書^{しよ}を受^う付^けなかつた。

〔事務官〕「政府^{せいふ}は一人^{ひとり}たりとも殘^{のこ}さずに連^つれ歸^{かへ}れとの命^{めい}令^{れい}である、奥^{おく}地^ち
に歸^{かへ}れぬ者^{もの}は致^{いた}方^{かた}がないが歸^{かへ}る事^{こと}の出^で來^きる者^{もの}を殘^{のこ}して置^おいては
命^{めい}令^{れい}に對^{たい}し私^{わたし}の職^{しやく}責^{せき}に拘^かはる、且^{かつ}今は敵^{てき}味^み方^{かた}と分^われて相^あ戦^{せん}ふ
時^{とき}である、卿^{あな}はソノ敵^{てき}國^{こく}政^{せい}府^ふの保^ほ護^ごに安^{やす}んずる事^{こと}が出^で來^きると思^{おも}ふ
るか、黑^{くろ}龍^{りゅう}江^{かう}沿^{がん}岸^{あん}の居^き留^{りゅう}民^{みん}を訪^{たづ}問^{もん}すると云^いつても、敵^{てき}國^{こく}人^{じん}の卿^{あな}
自^じ由^{りゆう}に旅^{りょ}行^{かう}が出^で來^きると思^{おも}つて居^ゐるのですか、冒^{ぼう}險^{けん}とも無^む謀^{ぼう}とも
ない亂^{らん}暴^{ぼう}な考^{かんが}へではありませんか。』
「親切^{しんせつ}に無^む謀^{ぼう}なる企^きてを諫^いめてくれられたけれども私^{わたし}の決^{けつ}
す事^{こと}は出^で來^きなかつた。」

太田覚眠が辿った経路（明治37年2月12日～12月6日）



太田覚眠とともに帰国した日本人

太田覚眠とともに帰国した日本人の在留地別内訳 (『新愛知新聞』明治37年12月9日)

ニコラエフスク 277名

ブラゴヴェシチェンスク 225名

ゼーヤ 54名

ハバロフスク及び満洲各地 196名

サハリンで拿捕された帆走船の乗組員 63名

合計815名

ニコラエフスク居留民の構成

《表一》ニコラエフスク居留民の構成

原籍地	男	女	総計
長崎	51	86	137
熊本	6	13	19
福岡	8	1	9
佐賀	4	10	14
その他	87	9	96
総計	156	119	275

ニコラエフスク居留民の特徴

- (1)全体に占める九州出身者の割合が高い
- (2)九州出身者に占める女性の割合が圧倒的に高い
→居留民の大部分は「娼婦」であったと考えられる

ブラゴヴェシチェンスク居留民の構成

《表三》ブラゴヴェシチェンスク居留民の構成

職業	長崎		熊本		福岡		佐賀		その他		総計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
料理店経営者	3	1	1							1	5
料理店経営者の妻		1		1						4	3
酌婦		44		18		2		8			76
料理職	3	1			1				2		7
写真師	3		4		2				7		16
理髪職			2						2		4
時計師	1		1				1				3
時計師見習	1										1
洗濯業	11		7						3		21
鍛冶職人	2								1		3
大工	1		2				1				5
ペンキ職人	1								1		4
裁縫職人	1										1
請負業	1		1						2		4
商業	2		4		2				1	1	12
雑業	2										1
機関油屋	1								1		1
医師											1
薬剤師											1
薬剤生			1						1		3
留学	1					1			1		1
醸造研究							1				4
妻（料理店経営者の妻を除く）		22		6						2	33
子供	5	2	1	2					1	1	13
不明	3	9	1	3					9	29	18
総計	40	84	23	32	4	3	2	9	29	41	238
	124		55		7		11		41		

ブラゴヴェシチェンスク娼家

《表二》ブラゴヴェシチェンスク娼家

姓	職業	原籍	生年月日
友ハ	料理店	長崎県長崎市	明治三年二月
キミ	友ハの妻	長崎県長崎市	明治九年
タ子	酌婦	長崎県西彼杵郡	明治十四年
ナヲ	酌婦	熊本県天草郡	明治十三年一月二日
マツエ	酌婦	熊本県天草郡	明治二十二年三月二十二日
キナ	酌婦	長崎県南高末郡	明治十四年
ヤヨ	酌婦	山口県赤間市	明治十八年四月十四日
カノ	酌婦	熊本県天草郡	明治十七年
チヨノ	酌婦	長崎県南高末郡	明治二十一年
カズ	酌婦	長崎県南高末郡	明治十八年
ワセ	酌婦	長崎県西彼杵郡	明治十五年八月六日
セツ	不明	熊本県天草郡	明治九年八月十五日
ヤヲ	酌婦	熊本県天草郡	明治十七年九月十五日

ブラゴベシチェンスク娼家「酌婦」

(1)長崎、熊本出身者が多い

(2)最も若い「酌婦」は15歳

太田覚眠がシベリア残留邦人帰国実現のために果たした役割

(1)日本人居留民の精神的支柱としての役割

- ・ 説教、講話（「慰問」）
- ・ 児童のための識字教育
- ・ 青年のための夜学会
- ・ 風紀取締り
- ・ 「ペルミ日本人会」、「帰朝同胞協会」組織
- ・ 天長節などの行事挙行
- ・ 死者の弔い（法名授与「貞眠」、「良眠」など）

(2)交渉役としての役割

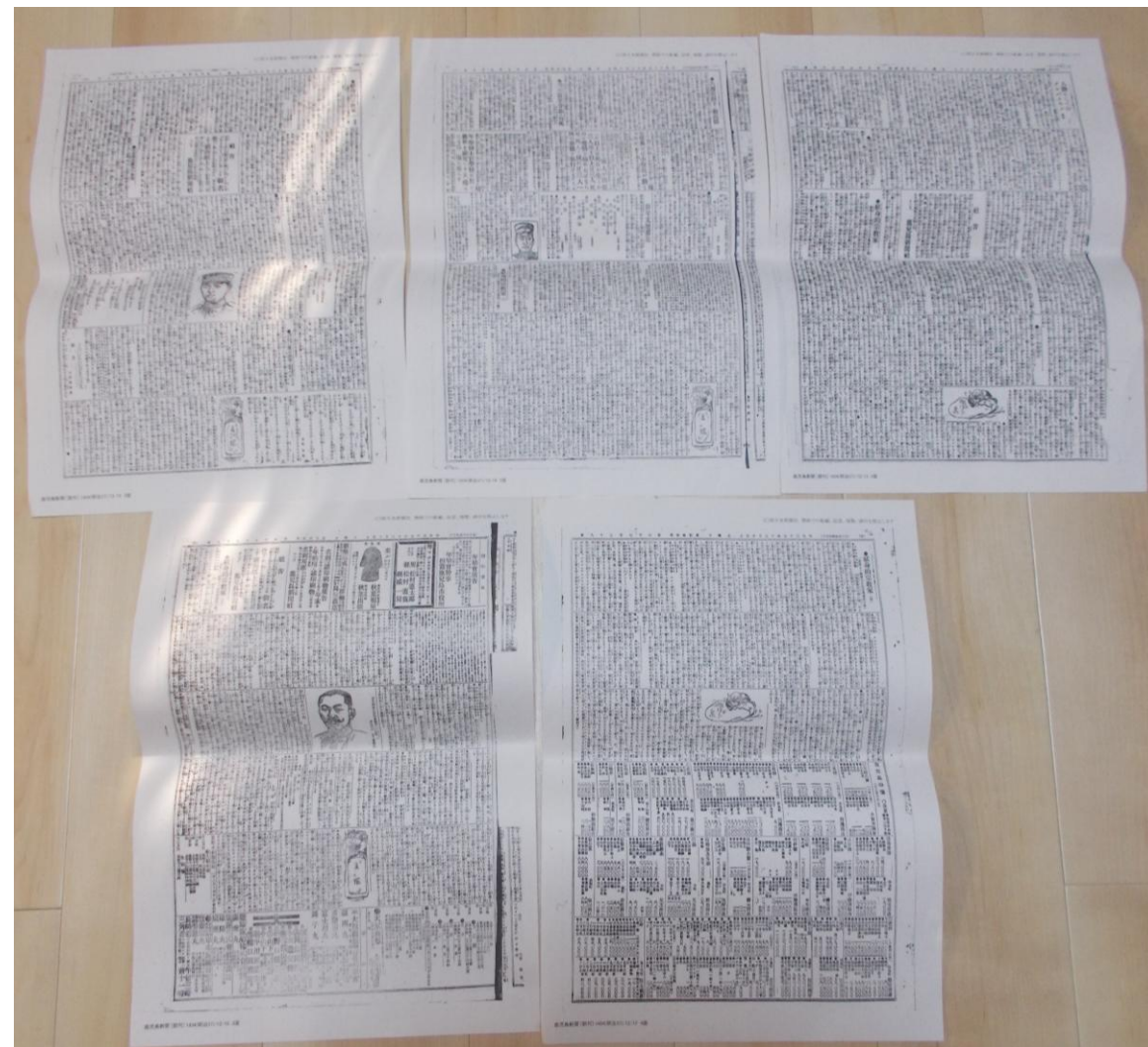
- ・ 日本語文書作成能力
- ・ ロシア語文書作成能力
- ・ 国際法やロシア国内法に対する知識
- ・ 交渉力（日・米・露・独の官僚との帰国交渉、資金援助依頼）

鹿児島新聞(南日本新聞の前身、鹿児島県立図書館蔵)

「献身的宗教家 露領より帰朝せる太田覚眠氏の談」

- (一)明治37年12月13日
- (二)明治37年12月14日
- (三)明治37年12月16日
- (四)明治37年12月17日
- (五)明治37年12月18日

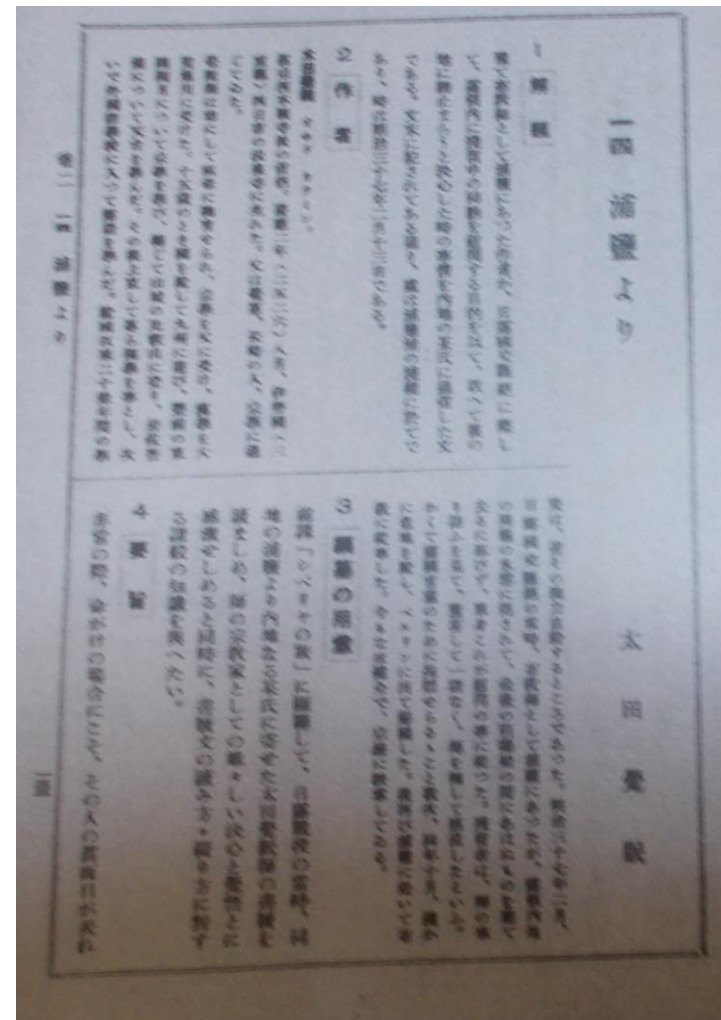
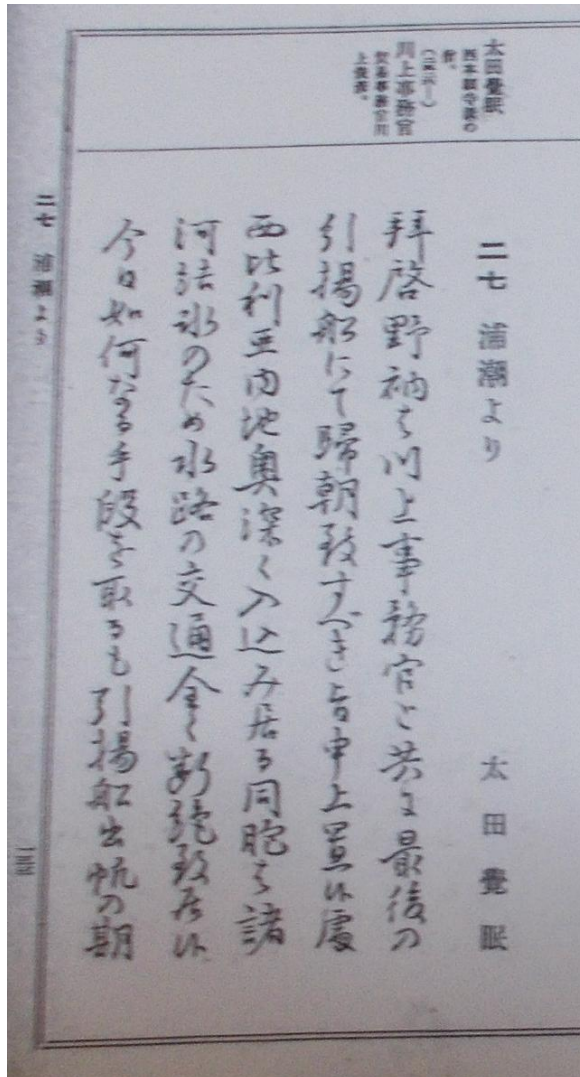
明治37年、鹿児島新聞発行部数1万部突破
※南日本新聞社編『南日本新聞の百二十年』(2001年)
明治38年、鹿児島県人口約120万人、世帯数約21万戸
※原口泉等『鹿児島県の近現代』(山川出版社、2015年)



1904年(明治37)2月13日付け太田覚眠より日本内地某氏宛て書簡

吉田彌平編『中學國文教科書』巻2
(光風館書店、明治39年～大正7年)

光風館編輯所編『中學國文教科書教授備考』
巻2(光風館書店、昭和10年)



教科書から消えたのは
いつか？

- (1)昭和10年代
いわゆる「軍国主義」思想に
反する
- (2)敗戦後
GHQによる教科書統制